



2016 (平成28) 年2月15日 (月) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: http://www.ecesj.com/

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 藤田乾一, 事務局長 小川鶴蔵)

1	はじめに	1
2	第20回記念東京大会開催案内	2
3	2016年度海外学会等への派遣者を募集します	3
4	行事開催報告	5
4.1	応用生態工学会連続セミナー	5
4.2	第14回北信越現地ワークショップ in 富山	7
4.3	第1回ミュージアム連携ワークショップ in 大阪	11
5	2015年度行事経過と今後の予定	14
6	事務局より	16

1 はじめに

ニュースレターもこれが今年度最後の号となります。年明けから、すでに学会活動が始まっています。1月25日には、既に前号でお知らせした第20回記念大会の開催に向かって、実行委員会が始動しました。10年前の第10回記念東京大会では、「応用生態工学会の10年とこれから ー土木工学と生態学の壁はとりのぞかれたか?ー」をテーマにした公開シンポジウムが開催され、意欲的な討論がなされました。今回においても、学会創設の理念である、新しい境界領域の研究が進んでいるかなど、幅広い討論がなされるよう、幹事会と実行委員会を中心に議論が進んでいます。

この号では、2016年度海外学会等への派遣者の募集要領を掲載しています。応募の締切りは3月31日(木)で、4月中の発表を予定しています。

また、本年3月末には各委員会委員の任期が終了し、4月1日から新しい委員が選任されます。第4次中期計画も昨年9月の総会で承認されており、一層の活動の具体化が期待されています。

2 第20回記念東京大会開催案内

応用生態工学会 2016年度の第20回記念大会について、第1回実行委員会を2016年1月25日に開催し、開催準備がスタートしました。

■大会実行委員長：虫明功臣 東京大学名誉教授（学会副会長）

■開催日と日程案

【開催日】2016年9月2日（金）～2016年9月4日（日）

【日程案】

第1日目 9月2日（金）：研究発表（ポスター）、自由集会

第2日目 9月3日（土）：研究発表（口頭）、自由集会、懇親会

第3日目 9月4日（日）：午前：役員会・総会等、午後：公開シンポジウム

※エキスカッションは9月1日（木）または5日（月）で予定

スケジュールは、変更することがあります。詳細なスケジュールは、ニュースレターNo. 72（5月下旬発行）、ホームページにてご案内します。—

■公開シンポジウムのテーマ（案）

（仮）流域管理と地域の未来を考える—応用生態工学の課題と展望—

■会場

【開催場所】東京大学 農学部弥生講堂，
弥生キャンパス第1号館
<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/>

【所在地】東京都文京区弥生 1-1-1

【交通】右図のとおり

最寄駅：東京メトロ南北線

「東大前」徒歩1分

東京メトロ千代田線

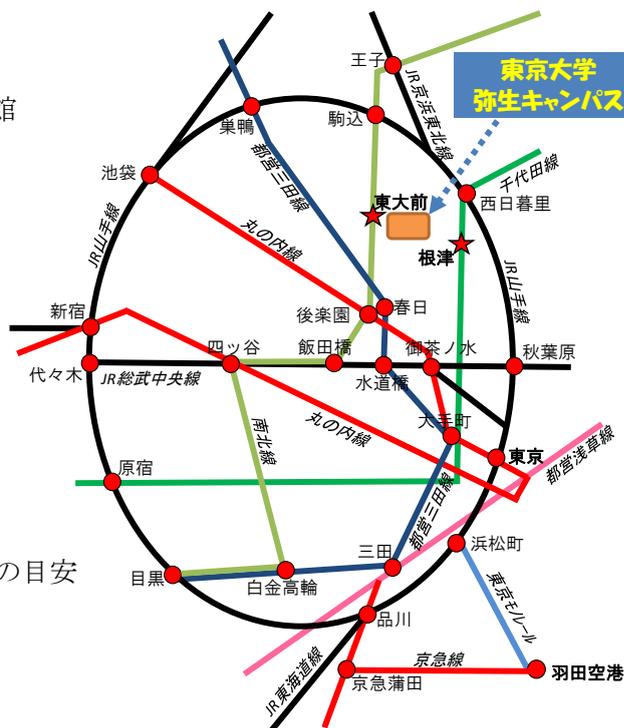
「根津」徒歩10分

主要駅から「東大前」までの所要時間の目安

◎「東京」から約20分

◎「新宿」から約30分

◎「羽田空港」から約60分



3 2016年度海外学会等への派遣者を募集します

国際交流委員会委員長 吉村千洋

2016年度の海外学会等への派遣者を募集します。以下の募集要領をご覧ください。

国際交流委員会では本制度を広く活用していただくため、昨年度に募集要領の改定を行いました。本制度を活用した研究者や技術者から有意義な経験や体験が報告されていますので、ぜひご応募を検討ください。

2016年度海外学会等への派遣者の募集

国際交流委員会

応用生態工学会・国際交流委員会（委員長：吉村千洋）では、2016年度の海外学会等への派遣研究員1名を募集します。募集要領の概略は以下のとおりです。詳細は、学会ホームページをご確認のうえ、事務局まで申し込みください。

海外学会等への派遣者募集要領

1. 目的

自然環境と開発の問題については、我が国だけに限らず多くの国々で関心が持たれ、様々な研究と実践的な試みが行われてきている。応用生態工学を発展させるためには、こうした海外での活動に積極的に係わり参加することによって、情報を得ながら、人的交流を図ることが求められている。

応用生態工学会では、ここに会員から希望者を募り、「派遣研究員」を審査選考して、当該年度に海外で開催される応用生態工学に関連する学会・シンポジウム・国際会議等に派遣し、その内容を応用生態工学会会員に報告するものである。

2. 選考

1) 資格

- ① 応用生態工学会の正・学生会員であること（募集開始時点で会員でなくても、会員となることを条件として応募可能とする。）
- ② 学生あるいは35歳未満の研究者・技術者

2) 派遣研究員の選考

- ① 学会としての総助成額を20万円とし、原則1名、場合によっては2名を選考する。
- ② 選考にあたっては国際交流委員会において書類審査を行い、候補者を選定した上で国際交流委員会にて決定し、幹事会および理事会に選考の経緯および結果を報告する。

3) 選考基準

- ① 派遣対象となる会議のテーマと本人のバックグラウンド（研究・調査経験）の整合性
- ② 派遣対象となる会議で何を学ぼうとしているのか、その焦点を明確に述べているか否か
- ③ 国際会議に出席して内容を把握できる能力
- ④ 応用生態工学への関心の度合い
- ⑤ 応用生態工学会での活動・参加状況・受賞歴

4) 派遣後の要件・手続き等

- ① 派遣研究員は、海外渡航の成果を指定の様式を用いて報告するものとする（報告内容は本学会のニュースレターおよび会誌“応用生態工学”に掲載します。なお、会誌“応用生態工学”では、「トピックス」に掲載します。）。
- ② 派遣終了後は、助成額の使途（使用費目と金額）について、決算報告するものとする。渡航先によっては、助成額の総額を上回る金額を使用した場合も考えられるが、その場合は、それらも含めて決算報告を行う。使用金額が助成額の上限を超えなかった場合には、余剰金を応用生態工学会に返金するものとする。
- ③ 何らかの理由により海外渡航と学会参加を中止する事態が生じた場合には、すみやかに応用生態工学会事務局にその理由などを報告するものとする。
- ④ 派遣研究員は、関連した研究や技術開発について、会誌“応用生態工学”もしくは英文誌“Landscape and Ecological Engineering”に論文を投稿することが推奨される。

3. 申請書

派遣希望者は、会員番号、氏名、所属、連絡先（住所・TEL・FAX・E-mail）、年齢、性別、専門分野、希望派遣学会等（開催会議等の名称、主催者名、開催月日、開催国・地名、会議等の目的・内容、現地見学会の有無と内容、参加申し込み期限、参加費、研究発表を行うか否か（その形式）、案内パンフ等がありましたらそのコピーをお送りください。）、および派遣希望理由（上記の「3」選考基準」の各項目）を、A4計2枚以内（書式自由）にまとめ、郵送・FAX・E-mail等にて学会事務局に申し込みください。

なお、4月以降に所属が変わる場合は、4月以降の連絡先も付記してください。

4. 申込期間

2016年2月22日（月）～3月31日（木）事務局必着

5. 派遣決定時期

2016年4月下旬までに決定

6. 派遣を推奨する国際学会およびシンポジウム

- Annual Meeting of Society for Freshwater Science (SFS)
<http://sfsannualmeeting.org/>
- Summer Meeting of Association for the Sciences of Limnology and Oceanography (ASLO)
<https://www.sgmeet.com/aslo/santafe2016/default.asp>

その他、以下の国際学会が主催する国際会議

- American Geophysical Union (AGU) <http://sites.agu.org/>
- European Geosciences Union (EGU) <http://www.egu.eu/>
- Society for Freshwater Science (SFS) <https://www.freshwater-science.org/>
- International Society for River Science (ISRS) <http://www.riversociety.org/>
- International Water Association (IWA) <http://www.iwahq.org/1nb/home.html>

なお、上記以外の国際学会やシンポジウムでも応募できます。

4 行事開催報告

4.1 応用生態工学会連続セミナー

応用生態工学会では、賛助会員をはじめとする会員の皆様が、環境に係る行政や学識者と意見交換を行い、日ごろの事業や研究、将来の国土保全に役立てていただければと考え、連続セミナーを開催することとしました。

(1) 第1回 未来の環境を語り・考える会

連続セミナーの初回として、平成27年12月17日に応用生態工学会東京の主催にて第1回の「未来の環境を語り・考える会」が開催されました。

1) 日時：平成27年12月17日（木）15:00～17:00

2) 場所：一般財団法人水源地環境センター 会議室

応用生態工学会事務局（意見交換会）

3) 出席者：賛助会員・正会員・事務局 計17名

4) 議事次第

- ・挨拶：応用生態工学会理事 森北佳昭（(一財)水源地環境センター理事長）
- ・講演：国土交通省水管理・国土保全局河川環境課 堂菌俊多 河川環境保全調整官
テーマ：河川行政が、今、考えていること、河川事業と河川環境の整備・保全
- ・意見交換
- ・司会：応用生態工学会東京 久保市浩右

5) 概要

水源地環境センター森北理事長ご挨拶の後、国交省河川環境課 堂菌調整官より、約90分間のご講演がありました。主なご講演内容を列挙します。

(1) 人口減少・高齢化問題に対する解決のヒント、新たな国土形成計画の紹介

(2) 国土交通省水管理・国土保全局で話題となっていること

- ① 気候変動の適応策
- ② 既往ストックの有効活用
- ③ 水防災意識社会再構築ビジョン
- ④ 河川砂防技術基準（計画編）の大幅改定（平成28年度末）

(3) 人口減少・高齢化の中、公共事業、特に河川事業は何に重点していくか

(3)-1 河川が運ぶ水の量と質に着目して（表流水から地下水まで）

- ① 水循環施策の現状と課題
- ② 水循環基本法と水循環基本計画
- ③ 飲み水の安全性について
- ④ 河川環境に配慮したダムの弾力的管理

(3)-2 河川が有する環境的価値に着目して

- ① 「多自然川づくり」に関するこれまでの取り組み
- ② これから四半世紀の展望について

ご講演に続いて、意見交換では、これらを題材として活発な議論、情報交換が行われました。



(2) 第2回 未来の環境を語り・考える会

第2回は、参加者が「未来の河川環境のために」どのようなことをしたらよいかの題材を持ち寄り、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課 堂菌調整官を囲み、意見交換をしました。

1) 日時：2016年1月19日（火） 15:30～18:00

2) 場所：応用生態工学会事務局

3) 出席者：賛助会員・事務局 計13名

4) 次第

- ・挨拶：応用生態工学会 小川事務局長
- ・参加者の発表
- ・意見交換
- ・司会：応用生態工学会事務局改善WG 浅見

5) 概要

- (1) 発表者：①応用地質(株) 浅見和弘
②いであ(株) 西 浩司
③(株)建設環境研究所 益岡卓史
④日本工営(株) 今村史子
⑤パシフィックコンサルタンツ(株) 小笠原奨悟
⑥(株)建設技術研究所 渡邊敬史
⑦(株)建設技術研究所 杉本龍志
⑧(一財)水源地環境センター 大杉奉功
⑨応用地質(株) 沖津二郎

記録 応用生態工学会東京 久保市浩右 (敬称略)

(2) 議論で出たキーワード

- ①技術 グリーンインフラ、生態系サービス、美しい地域・河川、マップ、自然資本（環境指標）、土砂が自由に流れる河川、地方創生
- ②方法 評価方法（国家勘定、定量評価、コスト、便益）
子供の目線の河川環境
- ③人 組織、コーディネート力、利害関係

・この連続セミナーは、賛助会員のサービス向上の一環として開催しました。



- ・ 次回の応用生態工学会東京における意見交換会は、本年4月以降に、応用生態工学会事務局で開催する予定です。
- ・ なお、東京以外の各地域において、同様のセミナーの開催を希望される場合には、事務局改善WGにおいて調整を行いますので、学会事務局まで連絡をお願いします。

(文責) 応用生態工学会事務局改善WG 浅見和弘



4.2 第14回北信越現地ワークショップ in 富山 「山－川－海のつながりを考える PART II」

応用生態工学会富山

北陸基礎開発(株) 桜井幹郎

1. 概要

「第14回北信越現地ワークショップ in 富山」が平成27年10月16日(金)～17日(土)に富山県立大学で行われました。富山でのワークショップ(以下、WS)の開催は、これで4回目となります。

今回のWSのテーマは、「山－川－海のつながりを考える PART II」です。「PART II」というのは、富山での初めてのWS開催時(平成15年10月)のテーマが「陸－川－海のつながりを考える」であり、それから12年、再度このテーマを検討すべき時期に来ていると考えたからです。WSでは、山を供給源とする土砂や栄養塩に着目した講演やこれらの海へ及ぼす影響についての講演がありました。海に関する講演が多かったのも今回のWSの特徴です。

今回の参加者は、WS107名、現地見学会22名でした。



高橋剛一郎実行委員長の挨拶

2. 基調講演

「森林流域からの栄養塩流出－流出負荷量評価の問題を解く鍵としての水文特性－」

鳥取大学農学部准教授 芳賀弘和

森林から流出する水と物質をモニタリングし、その質や量を評価することは大きな意義があるといえる。本講演では、栄養塩として窒素・リンおよび溶存有機炭素(DOC)を取り上げ、森林域から流出する栄養塩の量(流出負荷量)の推定方法および流出負



芳賀氏の講演の様子

荷量の評価に関する問題点と今後の課題について説明された。

流出負荷量を評価するためには、流域の水文特性に基づいて平水時と出水時の両者の流量と濃度の変化を的確に把握、推定することが不可欠である。

3. 一般講演

一般講演は、山—川—海をテーマに6編の発表がありました。

3.1 「手づくり魚道に挑戦！～富山市水辺をきれいにする会の取り組み～」

富山県農林水産部 飯野浩太郎

河川に堰などの構造物を設置する場合、「魚道」をつくることと定められている。「魚道」の設置は行政が中心となる場合がほとんどであったが、近年は地元住民や NPO などが簡易な魚道を造る事例が増えている。本講演では、「富山市水辺をきれいにする会」が取組んだ安価な材料（木材・土嚢等）を用いた簡易魚道の構築について発表があった。今後の環境保全対策には、地元や NPO との連携が大切と感じられた。



飯野氏の講演の様子

3.2 「富山海岸の人エリーフに創出された生態系（付着生物に着目して）について」

富山県土木部 南保仁士

富山海岸では、富山湾特有の「寄り回り波」や冬季風・波浪等の気象・海象条件があいまって海岸浸食が著しく、一部では砂浜が消失しつつある。そこで富山県では、離岸堤や人工リーフの整備を進めている。本講演では、人工リーフに付着した生物に着目し、新たに創出された生態系について報告がされた。

砂泥域の海底に構造物が設置されたことにより、貝類や海藻が付着し、さらに魚類も集まってきた。

会場からは、プランクトン等もっと微小な生物にも着目すべきとの意見があった。



南保氏の講演の様子

3.3 「高月海岸における藻場の変化」

富山県立滑川高等学校海洋科 澤田和之

日本各地の沿岸で「磯焼け」という海藻が枯れる現象が起きており、富山県高月海岸も例外ではなく、藻場（もば：海藻の森や林）の減少が進んでいる。滑川高校海洋科では、かつてあった藻場の姿を取り戻そうとする試みの活動や調査を行っている。本講演では、これらの取り組みについて報告があった。

藻場の復活には、光合成ができる環境と栄養塩が必要であり、これらは山、川に依存している。また、海水温度の上昇が藻場の生育に悪影響を及ぼしていることが分かった。



澤田氏の講演の様子

3.4 「黒部川の土砂循環の健全化に向けて」

国土交通省 黒部河川事務所 藤田士郎

黒部河川事務所では、山－川－海の保全を一手に担当しているという特性を活かし、黒部川の「自然な土砂移動」を実現するとともに、望ましい生物生息環境を取り戻すことを目指している。

本講演では、黒部川における総合的土砂管理について発表があった。土砂を適切に流すことが河床低下や海岸浸食を防ぎ、生態系の保全に役立つ。宇奈月ダムの排砂や砂防ダムのスリット化など、土砂が流れる工夫や、今後の河道計画、海岸の対策についての説明があった。



藤田氏の講演の様子

3.5 「千里浜再生プロジェクト」

石川県土木部 鈴木 穰

日本で唯一車で走ることができる千里浜では、海岸浸食によりかつての姿が失われつつある。石川県では、この千里浜の再生を目指しさまざまな対策を施している。ここでは、海上投入による砂の供給、人工リーフの効果、砂流出防止工（サンドパック）の効果について報告された。千里浜の砂と近い粒径の砂を投入し、漂砂を利用して砂浜に砂を供給する方法（自然の土砂供給システム）をとっている。これらの対策が功を奏し、砂が回復しつつある。



鈴木氏の講演の様子

3.6 「富山湾の海谷とシラエビの関係について」

富山県農林水産総合技術センター水産研究所 南條暢聡

「富山湾の宝石」と言われるシラエビ（富山ではシロエビと称す）は、富山湾特有の海底谷「藍瓶（あいがめ）」に生息するエビです。このシロエビが漁獲できるのは、海底谷が発達していることが挙げられます。本講演では、海底谷の持つ生産性とシロエビの関係について発表された。

海底谷には、有機物を大量に含んだ高密度の水塊が海底谷を滝のように流れていく現象や、プランクトンのような浮遊生物を海底谷に集める効果のある渦状の流れなどが見られ、これらがシラエビの生育と密接な関係があると考えられている。



南条氏の講演の様子

4. 総合討論「山－川－海のつながりを考える PART II」

座長 玉井信行（東京大学名誉教授）

総合討論では、講演者をパネリストに迎え、活発な討論が行われた。

土砂の供給は、河床低下や海岸後退を防止するうえで重要であるが、生態系にとっては生育環境の破壊につながる可能性がある。しかし、山から出た土砂・栄養塩が川を通り海まで流れることが自然である。今後は、これらの土砂や栄養塩



総合討論の様子

も生態系の一部として考えていく必要がある。流れを遮る堰・ダムなどもあるものとして認め、どのように連続性を高めていくかが重要である。自然の資産を守り、自然と共生していくことが求められている。

5. 意見交換会

意見交換会は、グランテラス富山で開催されました。富山県土木部加藤次長の歓迎の挨拶、松井富山河川国道事務所長の乾杯を皮切りに、活発かつなごやかな意見交換？がなされました。次期WS開催場地の新潟を代表して、大川さんの挨拶がありました。

6. フィールドツアー

晴天のなか、WSの翌日10月17日(土)にフィールドツアーが行われました。WSで講演のあった富山の東海岸沿いを走り、黒部川河口から宇奈月ダムまでの行程です。

海岸沿いでは、人工リーフの設置現場および藻場の再生を取組んでいる高月海岸を見学しました。黒部川では、河口沿岸部・河道・護岸の状況、宇奈月ダムでは、排砂ゲートを見学し現地で討論を行いました。



宇奈月ダムでの記念写真



宇奈月ダム排砂路

7. 謝辞

今回のWS開催にあたり、多数の協賛・後援をいただきありがとうございました。特に、フィールドツアーの現地案内をしていただきました富山県の南保さま、滑川高校の澤田さま、黒部河川事務所の藤田さま他の皆様に篤くお礼を申し上げます。

<p>生物の多様性考える 県立大で生態工学会 応用生態工学会の第14回 北信越現地ワークショップ (富山新聞社後援) 写真 11は16日、県立大で2日間 の日程で始まり、会員や学 生ら約120人が生物多様 性の保全などについて考 え</p>	
<p>実行委員長の高橋剛一郎 県立大教授がいさつし、 一般講演で6氏が登壇し た。県水産漁港課の飯野浩 太郎技師は「富山市水辺を</p>	<p>きれいにする会」の活動を 取り上げ、スクラマスが週 上できる魚道を設置した取 り組みを紹介した。鳥取大 農学部の方賀弘和教授が 基調講演した。 応用生態工学は、生態学 と土木工学の境界に位置す る学問。17日は浜黒崎海岸 などを巡るフィールドツア ーが行われる。</p>

富山新聞 H27. 10. 17

- 話題提供3 「水質浄化ツールとしてのグリーンインフラ」
人と自然の博物館 三橋弘宗
- 総合討議
コーディネーター：藤原宣夫（大阪府立大学）
パネリスト：上甫木昭春（大阪府立大学）、谷田一三（大阪市立自然史博物館）、
三橋弘宗（人と自然の博物館）

趣旨説明 谷田一三（応用生態工学会）

応用生態工学会大阪として初のミュージアム連携ワークショップ開催にあたり、経緯や趣旨について説明していただきました。また、自然史系の博物館と連携しながら応用生態工学的な展開を西日本、東日本へと広めていくことが当面の目的である旨の説明をしていただきました。



趣旨説明 谷田一三氏

招待講演 グリーンインフラを探る視点について 上甫木昭春（大阪府立大学）

グリーンインフラを都市の基盤となる自然の骨格と定義し、都市の制御・象徴としてのグリーンインフラの創出の取り組み、近年のグリーンインフラの現状と再生のあり方について、事例を踏まえつつ説明していただきました。グリーンインフラを探る視点については、伝統的な暮らしにみるグリーンインフラの知恵を踏まえながら、文化性を中心とした多面的アプローチが重要であるとの説明をしていただきました。



講演者 上甫木昭春氏

話題提供1 日本におけるミシシippアカミミガメ問題 亀崎直樹（須磨海浜水族園）

1960年度より日本に輸入されるようになった外来種であるミシシippアカミミガメの生態特性や在来の生態系へ与える影響、また須磨海浜水族園で実施してきたミシシippアカミミガメの研究と防除について説明していただきました。池では防除活動をすれば効果が維持されるが、河川では駆除しても1年後には再び増加してしまい効果が維持できない状態で、河川における防除は困難であるとの説明をしていただきました。



講演者 亀崎直樹氏

話題提供2 ヒゲナガカワトビケラによる河川の浄化機能 谷田一三（大阪市立自然史博物館）

流下有機物をろ過摂食する造網性のヒゲナガカワトビケラによる河川の浄化機能について、アオコによる汚染が顕著であった諏訪湖からの流出河川である天竜川での実験結果について説明していただきました。天竜川においてヒゲナガカワトビケラの呼吸や羽化で炭素ベースで年間約6%の流下有機物を持ちだしていることが判明し、広い意味で浄化機能を持つグリーンインフラと考えることができるとの説明をいただきました。



講演者 谷田一三氏

話題提供3 水質浄化ツールとしてのグリーンインフラ 三橋弘宗 (人と自然の博物館)

生態系を利用した水質浄化は要素技術として一定水準に達しているが、性能面、コストや維持管理の面で課題も多い。しかし、導入するに相応しい局面と機能のマッチングにより、グリーンインフラとして普及する可能性がある。機能発揮事例として、篠山城のお堀の浅水管理による水質浄化、海外の都市部での氾濫原を用いた水質浄化、また最も劣化した環境と考えられる最終処分場からの処理水の水路式水質浄化などの事例の解説、今後の展開について説明をいただきました。



講演者 三橋弘宗氏

総合討議 コーディネーター：藤原宣夫 (大阪府立大学)

パネリスト：上甫木昭春 (大阪府立大学)、谷田一三 (大阪市立自然史博物館)、
三橋弘宗 (人と自然の博物館)

総合討議では、「グリーンインフラのハビタットとしての質的向上」、「グリーンインフラの機能向上」、「新たなグリーンインフラの創出に向けて」の3つの議題について討議がなされました。

討議の結果、グリーンインフラの質的・機能向上には、モニタリング調査を継続して実施し、有用性を証明する基礎データの蓄積が重要であること、新たなグリーンインフラとしては、潮止堰、冬水田んぼ、湧水、沿岸部などがキーワードとなることが示されました。応用生態工学会では、博物館、水族園との連携を強めて、これらキーワードを活かして行く必要があることを共通認識として締めくくられました。



総合討議

(左より藤原氏、上甫木氏、
谷田氏、三橋氏)

おわりに

応用生態工学会大阪として第1回ミュージアム連携ワークショップを無事開催することができました。実行委員長をはじめ事務局ならびに実行委員の協力の上無事終えることができましたことに厚く感謝申し上げます。来年度以降もミュージアム連携で様々な分野の先生に話題提供を頂き、応用生態工学的な視点から生活に役立つようなことについて考えていきたいと思っております。継続的なワークショップとして確立されることを願っています。

5 2015年度行事経過と今後の予定

4.1	2015年度（平成27年度）開始
4.6	第1回次期役員募集・推薦委員会 (麴町：応用生態工学会事務所)
4.5～24	国際交流委員会（メール会議）
4.14	事務局改善ワーキンググループ会議 (麴町：応用生態工学会事務所)
4.17	郡山大会第2回実行委員会 ((株)復建技術コンサルタント会議室)
4.25	2015年度海外学会等派遣者決定
5.12	会誌編集委員会 (麴町：応用生態工学会事務所)
5.12	第64回幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)
5.15～21	第76回理事会（メール会議）
5.22	ニューズレター68号 発行
6.1～30	次期役員候補募集
6.12	普及・連携委員会 (熊本市国際交流会館)
6.12～13	第7回全国フィールドシンポジウムin熊本 ～河川・沿岸環境の変化と土砂管理～ 6月12日（金）：シンポジウム 6月13日（土）：フィールドツアー (熊本市国際交流会館、球磨川流域)
6.18	第77回理事会 (麴町：弘済会館)
6.28	会誌「応用生態工学」Vol. 18-1 発行
7.6	第2回次期役員募集・推薦委員会 (麴町：応用生態工学会事務所)
7.9	地域勉強会in福井 ～技術者のための魚道講座～ (九頭竜川流域防災センター他)
7.17	第65回幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)
7.29	第3回次期役員募集・推薦委員会（メール会議）
7.31	ニューズレター69号 発行
8.6	第78回理事会 (麴町：弘済会館)
8.15～19	第79回理事会（メール会議）
8.17	応用生態工学会札幌セミナー「本来の川を取り戻すために…その10」 (札幌市豊平川さけ科学館、札幌市南区区民センター)
8.26	事務局改善ワーキンググループ会議 (麴町：応用生態工学会事務所)
9.10～13	応用生態工学会第19回郡山大会 (日本大学工学部キャンパス) 9月10日（木）：エクスカージョンA〔三春ダムコース〕（午前半日） ：研究発表（ポスター）、自由集会 9月11日（金）：研究発表（口頭）、自由集会、懇親会 9月12日（土）：午前：総会、午後：公開シンポジウム 9月13日（日）：エクスカージョンB〔福島県松川浦・仙台湾南部海岸コース〕
9.10	普及・連携委員会 (日本大学工学部)
9.10	会誌編集委員会 (日本大学工学部)
9.10	国際交流委員会 (日本大学工学部)
9.12	第66回幹事会、第80回理事会 第81回理事会・第67回幹事会 (日本大学工学部)
9.13	国際シンポジウム 流域・沿岸におけるグリーンインフラの概念と方法論 ～応用生態工学の今後の展開を考える～ (東京工業大学くらまえホール)

10. 4	第1回ミュージアム連携ワークショップ in大阪 公開講座：自然史からグリーンインフラを考える (大阪市立自然史博物館)
10. 16～17	第14回北信越現地ワークショップin富山 山－川－海のつながりを考える PART II (富山県立大学他)
10. 18	応用生態工学会福井 平成27年度地域勉強会 天然アユを名田庄に！－榎谷川魚道群から考える－ (おおい町里山文化交流センター、南川支流榎谷川)
10. 21	<後援>平成27年度多自然川づくり近畿地方ブロック担当者会議 (大阪合同庁舎第1号館)
11. 4	応用生態工学会長野 現地見学会 ～上下流の連続性を考える～ (千曲川、千曲市総合観光会館)
11. 6	<共催>第18回河川生態学術研究発表会 (東京証券会館ホール)
11. 13	応用生態工学会金沢 第1回視察研修 (自然共生研究センター)
11. 26	応用生態工学会福岡 第5回遠賀川中島自然再生研究会 (遠賀川水辺館)
12. 15	ニュースレター70号 発行
12. 17	応用生態工学会連続セミナー 第1回未来の環境を語り・考える会 (一財)水源地環境センター)
12. 28	会誌「応用生態工学」Vol. 18-2 発行
1. 19	事務局改善ワーキンググループ会議 (麹町：応用生態工学会事務所)
1. 19	応用生態工学会連続セミナー 第2回未来の環境を語り・考える会 (麹町：応用生態工学会事務所)
1. 25	第20回記念大会第1回実行委員会 (麹町：応用生態工学会事務所)
2. 15	ニュースレター71号 発行
2. 18	第68回幹事会 (麹町：応用生態工学会事務所)
2. 22～3. 31	2016年度海外学会等派遣者募集
3. 31	2015年度 (平成27年度) 終了
2016年度 (平成28年度) 行事予定	
4. 1	2016年度 (平成28年度) 開始
4. 5	理事会 (麹町：弘済会館)
4	国際交流委員会 (メール会議)
4	2016年度海外学会等派遣者決定
5	ニュースレター72号 発行
5	フィールドシンポジウム
6	会誌「応用生態工学」 Vol. 19-1 発行
7	ニュースレター73号 発行
7	幹事会 (麹町：応用生態工学会事務所)
8	理事会
9. 2～4	第20回大会 (20周年記念大会) 9月2日 (金)～9月4日 (日) (東京大学弥生講堂・弥生キャンパス)
9. 2～4	大会期間中に、幹事会、理事会、各委員会を開催

10. 28～29	第15回北信越現地ワークショップin新潟 (新潟市新潟日報メディアシップ日報ホール)
10～11	応用生態工学会福井 地域勉強会
12	ニュースレター74号 発行
12	幹事会 (麹町：応用生態工学会事務所)
12	会誌「応用生態工学」 Vol. 19-2 発行
2	ニュースレター75号 発行
2	理事会
3. 31	2016年度 (平成28年度) 終了

6 事務局より

6.1 いつもながらの勤務先等の会員情報変更登録のお願い

会員情報の変更登録は、ホームページのトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」から入力して、送信してください。

また、下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。

<http://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>

会員情報変更のご連絡は、学会事務局のアドレス、e-mail eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことも可能です。

会誌のお届け、ニュースレター、その他連絡では、かなりの不達が発生しています。よろしくお願いたします。

6.2 既刊学会誌を希望する会員に頒布します (郵送料は負担してください)

学会事務局では、現在、書類整理を進めています。その中では、学会誌の在庫が棚を占める割合が多いことから、これの整理に取りかかりました。今後は一定の保管量を確保して、残りは希望者への頒布、廃棄を考えています。希望者多数の場合は、先着順です。

希望される会員は、学会事務局のアドレス、e-mail eces-manager@ecesj.com までお知らせください。事務局では、申込者に郵送経費を計算してお知らせします。郵送料をいただいた後、発送します。

.....

[2016年1月31日現在会員数]

名誉会員 : 9名
 正会員 : 973名
 学生会員 : 125名
 合計 : 1,107名

LEE購読者数

正会員 : 85名
 学生会員 : 1名
 名誉会員 : 1名
 合計 : 87名

賛助会員 : 33法人 (50口)